

ナキウサギの分布と生態

おのやま けいいち
帯広畜産大学助教授

小野山敬一 (校閲)

本稿は『野生動物等実態調査報告書・ナキウサギ生態等調査報告書』（北海道保健環境部自然保護課一九九一）にもとづいて、本誌編集委員がその要点を記し、当調査に携わった小野山敬一・帯広畜産大学助教授の校閲をへてまとめられたものである。なお参考として「ナキウサギとは」を本誌編集委員が付記した。

ナキウサギとは

ナキウサギ（写1）は、北海道の自然保護関係者や登山愛好家にはなじみ深いものがあるが、その分布や生態などは、まだ十分に解明されていない。その一方で、例えば夕張岳や然別湖周辺のナキウサギ生息地域の一部では、大規模スキー場開発計画や観光道路計画がもちあがっているなど、生息環境への影響が懸念されている。

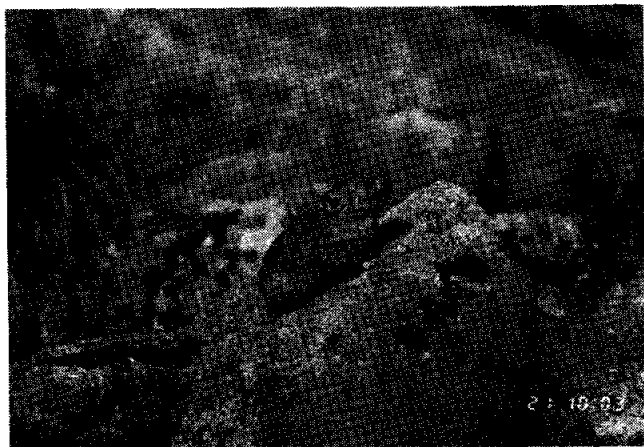
そうしたことから、ナキウサギの適切な保護管理の重要性がいつそう高まっており、基礎的な生息実態の把握が緊張の課題となっている。本稿は北海道保健環境部自然保護課の委託を受けて北海道自然保護協会が実施した、ナキウサギ生態等調査の概要を紹介するものである。

まず読者への便宜のため、『北海道大百科事典』（北海道新聞社一九八一）により、ナキウサギの概要を紹介する。なおこの項目は、ナキウサギの生態研究に先駆的な業績を残した、芳賀良一博士（元帯広畜産大学教授・故人）によって執筆されたものである。

ウサギ目ナキウサギ科に属する北海道の固有種。後水期（二万五千年前）に大陸から渡来した氷河期の遺存種（レリック）である。体重約一〇〇g、体長約一五cm。耳は円形で約一・

六cm、足は約二・六cmで裏面にも被毛が生えている。全身茶褐色（幼体灰褐色）の被毛におおわれ、換毛がはげしく、毛色に個体差がみられる。

代表的な生息地は大雪山の黒岳・白雲岳・日高山系の幌尻岳・戸島別岳などで、高山草本帯の岩場に群生する（筆者注・ただしナワバリがある）。食物はエゾコザクラ・イワブクロ・ツガザクラなどで、シダ類やハギも好食する。またトドマツ・カラマツの幼樹の梢を食べることもある。夏季岩の間隙を利用して敏活に行動し、時々岩の上でキチイ、キチイ、キチイ、と鋭く鳴き、静かにめい想もする。五～六月に三～五匹分婉



写1 ナキウサギ

し寿命は約三年。

北海道にナキウサギが生息していることは一九二五(大正一四)年ころには知られていたが、実際に確認されたのは一九二八(昭和三)年、置戸町のカラマツ造林地で捕獲されたのがはじめてであり、一九三〇年、岸田久吉により新種として発表された。

現在、北海道のナキウサギはエゾナキウサギ *Ochotona hyperborea jesoensis* として、キタナキウサギ *Ochotona hyperborea* の一亜種に位置づけられている。キタナキウサギはウラル、シベリア、モンゴル、中国北東部、朝鮮半島北部、カムチャツカ半島、サハリンに分布し、エゾナキウサギを含めて八亜種があるとされている。

なお北海道のナキウサギを天然記念物に指定しようとする考え方は第二次大戦直後からあり、『北海道の史蹟名勝天然記念物』(北海道教育委員会文化課編一九四九)には「指定予定」として「大雪山のなきうさぎ」が記されている。しかし一九七一(昭和四六)年に「大雪山」が「天然保護区域」に指定されたためか、現在までナキウサギそのもの(地域を定めず)の天然記念物指定への具体的な動きはなく、その間に夕張岳(これも四十余年前から「指定予定」だったが未指定)のナキウサギ生息情報が薄らいだり、夕張岳に大規模なスキー場計画がもちあがったため(会誌・北海道の自然二七号、一九八八参照)、北海道自然保護協会は一九八八(昭和六三)年に夕張岳の天然記念物指定促進とともに、ナキウサギを早急に天然記念物に指定するよう要望書を関係方面に提出している(NC六五号、一九八八参照)。

大雪山の分布実態調査

一九八九年七月から十月にかけて、帯広畜産大学

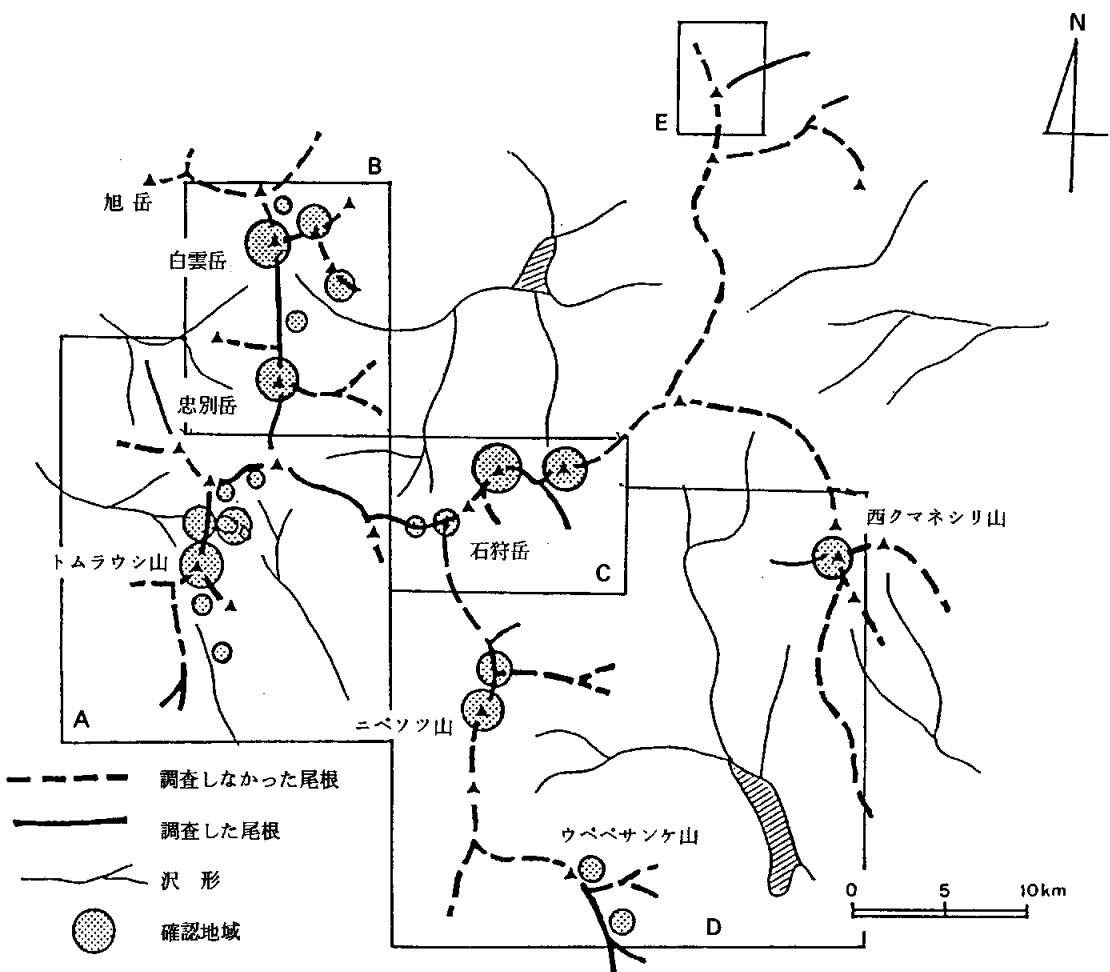


図1 大雪山系におけるナキウサギの分布の調査地と確認地域

の小野山ほかによって、大雪山のトムラウシ山、北
海岳、沼の原からユニ石狩岳、ニペソツ山、ウベペ
サンケ山、西クマネシリ山などで、ナキウサギの分
布と生息環境の調査が行われた。その結果、図1に
示す範囲の五三地点でナキウサギの分布が確認され
た。また今回の調査対象地外のお鉢平周辺の黒岳や
北鎮岳、十勝連峰の富良野岳、ツリガネ山などには
他の調査によって分布が知られているので、ナキウ
サギは大雪山では広く分布しているといえる。ただ
し広く分布するといっても、これが生息数の多いこ
と、あるいは多様な環境に耐えられること、を意味
するものではないことに注意したい。

ナキウサギ生息地の垂直分布をみると、五三地点
のうち五八%は標高が一、七〇〇〜一、九〇〇mの
ハイマツ帯、二五%が一、九〇〇〜二、三〇〇mの
ハイマツ帯にあり、残りの一七%が標高一、三五〇
〜一、七〇〇mのダケカンバ・ハイマツの混交帯と
ダケカンバ帯にある。ナキウサギはこうした高山帯
を中心とする、大きな岩石がいろいろと重なるよう
なガレ場で、岩と岩の間の穴が地下道となっている
ような環境に多く生息する。ナキウサギは高温の環
境に弱いため、温度を低く保つのに適した岩の間隙
の存在が生理的に必要と思われる。測定の結果では、
外気の温度が一、二〜二九℃と大きく変化しても、生
息穴は一〇〜一七℃の間であって安定していた。そ
れに対して湿度の方は外気と穴内にそれほど大きな
差はなく、外気で二七〜九一%、穴内で三八〜九七
%と、かなり広い範囲にあった。

生息地点の斜面の方向はさまざまで、特定方向の
斜面に生息地が多いという傾向はみられないが、岩
の大きさ、岩の露出度、それにガレ場の大きさは、
それぞれ大きいほどナキウサギの生息数が多いとい

う関係が示唆された。また岩場の近くには高山植物
群落や森林があつて、ナキウサギの餌を供給できる
条件も、ととのつていなければならない。

このようにナキウサギにとっては、高山帯を中心
とする大きな岩のガレ場が、好適な生息環境と考え
られる。ただし今回の調査では標高の低い沢沿いの
ガレ場は対象としていないが、例えば然別湖周辺な
ど低標高のガレ場には生息が確認されているので、
今後は低標高の沢沿い部分も調査する必要がある。

アンケートなどによる全道の分布情報

一九八八〜八九年に北海道自然保護課によって行
われた自然保護、林業、山岳、狩猟関係
者、動物研究者などを対象とするナキウ
サギ生息情報の全道的アンケート調査、
および既存文献による情報、さらに一部
の補足的な現地調査結果を、小野山ほか
が総合的に整理した結果、北海道におけ
るナキウサギの水平分布は図2のように
まとめられた。すなわち生息地点は全道
で五七〇カ所となり、その内訳は大雪山
系二四四カ所(四二・八%)、日高山脈
二四三カ所(四二・六%)、置戸地方五
一カ所(八・九%)、北見山地南部一九
カ所(三・三%)、夕張山地一三カ所
(二・三%)である。

ナキウサギの垂直分布は、低いところ
では様似町幌満川流域の標高五〇〇mから、
高いところでは大雪山白雲岳の二、二三
〇mまでの広がりがあるが、標高一、五
〇〇〜一、九〇〇mの高山帯を生息地と
するものが、かなり多い(図3)。生息

地の植生は主に高山群落・高山低木林、針葉樹林、
上部ダケカンバ林であり、またその地質は、ほとん
どが火山岩、深成岩、変成岩で、岩石としては安山
岩、はんれい岩、かこう岩が多い。

ナキウサギは北海道のほぼ中央部にのみ分布し、
その北限は渚滑岳、東限は置戸町勝山、西限は夕張
岳、南限はえりも町三枚岳である。北海道中央部以
外の北見山地北部、増毛山塊、阿寒、知床、あるい
は北海道西南部の山では、たとえ高山帯とガレ場の
環境を有していても、ナキウサギの生息分布情報は
得られていない。

ナキウサギの地理的分散能力は低いといわれてい

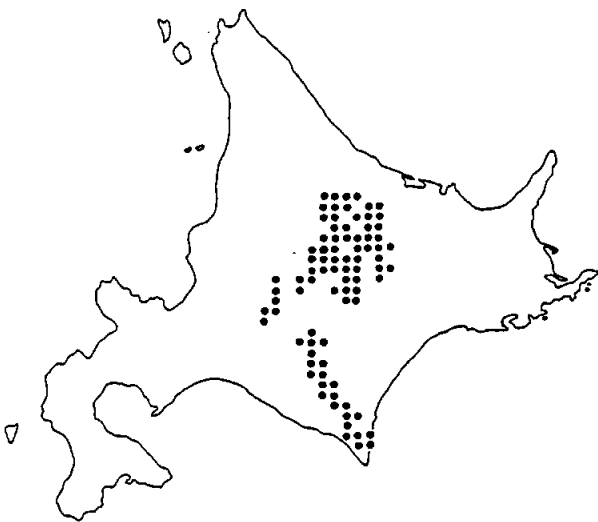


図2 北海道におけるナキウサギの水平分布(●)。1点
は2万5千分の1の地図に対応する(約18×20km)。

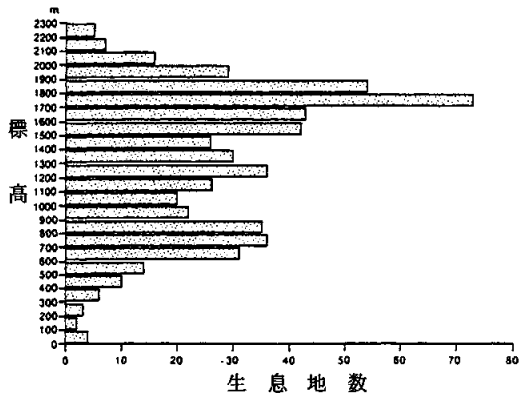


図3 北海道ウチケのナキウサギの垂直分佈 (生息地数570ヶ所)

るので、これらの山々では、もともと分散による到達ができなかったか、あるいは定着しても、ガレ場の規模が小さかったり、温度などの環境要因が適していなかったために、その後絶滅してしまったものらしい。

然別湖周辺のナキウサギの生態

然別湖周辺の東・西ヌブカウシ山の山麓では、純粋の高山帯に至らぬ針葉樹林帯の標高八五〇〜一、一〇〇m程度のガレ場を中心として、ナキウサギが生息している。その地区におけるナキウサギの日周活動の季節的变化、行動範囲、餌の貯食活動を小野山ほか、他の小哺乳類との種間関係を川道美枝子(フィリップス大学)が、一九八八〜一九九〇年の間に調査した。(なお然別湖周辺のナキウサギ生息地の一部に、「土幌高原道路」が計画され、自然保護上の問題となっていることについては、別項の

「土幌然別湖線道路問題を考える」を参照。)

まず日周活動をみると、地上にでて採食、日光浴、鳴き、排泄などを行う地上活動は、六、七、八月に高いが、ある時間帯に活動が集中することはなく、朝から夕方まで不規則に活動する。しかし気温が二〇℃を超えると不活発になるようである。鳴き活動は、七、八、十月に高くなり、その約九四％は構成音数が一の単音鳴きであり、四音以上の連音鳴きは約六％、二〜三音鳴きはきわめて少なかった。実験ケージ内に一頭だけで飼われたナキウサギはまったく鳴かないのに、調査地では明らかに応答鳴きが認められたので、鳴きはお互いの社会的なコミュニケーションとして役立っていると考えられる。その場合も、単音鳴き⇓単音鳴きの応答が多いが、とくに六月は連音鳴き⇓単音鳴きが多いという現象が認められた。

近年の野生動物の行動調査では、電波発信機を装着する方法(ラジオテレメトリ)が採用されることが多くなっているが、ナキウサギへの適用例は今までなかった。今回はじめて四個体のナキウサギに小型発信機がつけられ、行動圏などが調査された。その結果、行動面積は個体A(性別不明)で四、二〇〇平方m、B(雄)で一、三七二平方m、C(雌?)で一、八二二平方m、D(雄)で一、五三〇平方mとの数値が得られた。約一万平方mといえ一〇〇m四方程度であるが、これは従来の肉眼による直接観察法によって推定されたナキウサギ行動圏より広範囲なものである。その行動圏は岩のガレ場から森林にまたがっており、純粋の高山帯ではない然別湖周辺のナキウサギにとっては、森林地帯が重要な存在であると考えられる。

ナキウサギは冬眠しないので、夏の終わりころか

ら冬に備えて貯食活動がさかんになる。ナキウサギは特定の植物を食べるというよりも、付近の植物を広く利用するが、貯食でも同じような傾向がある。然別湖周辺の貯食場では、付近がアカエゾマツ林の場合三七種類の植生のうち三三種(八九％)、岩礫地の場合二一種類のうち一三種(六二％)が貯食されていた。しかし、これらの植物を平等に利用するわけではなく、環境により、季節に応じて、得やすい種類の中から運びやすい大きさや重さのものを貯食するようで、調査地の場合クロツリバナの葉、ハナヒリノキの葉、クロツリバナの落葉、ナカマドの中肋、ハイマツの葉の順で、季節にしたがって変化した。

然別湖周辺のナキウサギ生息地には、シマリス、オコジョ、エゾリスなども生息している。例えばナキウサギとシマリスは食物や生活空間をめぐって競合することはないのであるか。こうした種間関係は今まで調べられた例がないが、今回の調査の結果、シマリスは主に地表を移動し、ナキウサギは地下の岩の隙間を移動しているため、あまり出会うことはないようである。五m以内の距離で出会ったのは、合計七九時間の観察時間のうち六回だけで、一m以内の出会いではナキウサギがシマリスをさけた。またナキウサギが利用した二七種類の植物のうち、シマリスが利用可能な植物は一二種類あったが、シマリスは主に種子を利用するのに対して、ナキウサギは主に葉を食べるので、食物をめぐる直接的な競合はないようである。